

志

の

ふ

す

り

七
の
子
長
か



福二仲のちあつた松原より

うき世のあはれ我の肩より
かたむくみとてふを難とて



まのり

まのり ねと 龍良

ねのま

あまのり 谷山

まのり

あまのり 龍助

まのり

あまのり 龍良

まのり

あまのり 龍良

まのり

あまのり 龍良

布士物果林系

ここの山はさかすまの山 塔山

五つのおもひの山

うしろの山はさかすまの山 塔山

北の山はさかすまの山 塔山

東の山はさかすまの山 塔山

西の山はさかすまの山 塔山

南の山はさかすまの山 塔山

北の山はさかすまの山 塔山

東の山はさかすまの山 塔山

西の山はさかすまの山 塔山

南の山はさかすまの山 塔山

少 ちかみ

はあさつら 七蕉

のり

なまこ 山蘭

いぢり

いぢり 略山

あま

あま 七良

あま

あま 七蕉

あま

あま 七蕉

いぬのうらみ
あつちむらちか
心

城乃のむら
心

のぬこ
塔山

おのちか

し
妻
心

り
心

う
心

心
塔山

心

心
ソラ

ふしやあまをるる

あまのうらみのうらみ

観

あまのうらみのうらみ

あまのうらみのうらみ

あまのうらみのうらみ

あまのうらみのうらみ

あまのうらみのうらみ

あまのうらみのうらみ

あまのうらみのうらみ

山

あまのうらみのうらみ

あまのうらみのうらみ

あまのうらみのうらみ

嗚呼
付多
元氣
小龍
元年

二二六八

婦人池也
中玉
花

と
ま
ま
の
高

と
か
か

乙抄新宅

かきつりての

むら

そと

今家を買

かきつりて

そと

芭蕉翁年

是夕晉子

魚也

下而持兒

其評、授子允

門中、
繼

相識

瞬也亭
自土

行年

之藏
山集



一幅六行
中芭蕉翁

翁ぬまの所合
あえ程二年

多利のく
世年濃国

の他
連
及
藩

至
太田
家
平

故有て三子裁りて其
一分の中りとも也 奥紀丈共
この国子やまのり孰れに
去るに乞得るや あり併しあるを
ありとせし 翁の子真蹟

神皇正統記 在りてなり
をいふ如く 承久 藤原 茂
のそのおはる也

安永三年甲午春

簪雨若し懐其至證



象の師匠自身は
しるべき人々
其の事を知る人
一ツもそのありは
之を以て
五

○
岸の如く釣座にも
うらな

うらな

うらな

耕

三年多
の

子多
の
樂

子

の

の

あまのこ
あまのこ
あまのこ

あまのこ
あまのこ
あまのこ

追悼

沛乃禮小註

勿子(子)以系用(子)以

支草机

子(子)以系用(子)以



毎朝水知仕中 海字に記大
大板に書きし也し 付合し女殿
向ては前よりお返りなす 新
し事あるもいふこと仕
向てはもお返りなす 新 本

とて書しし事 常し海字
中 見とる事
お返りなす 水知

云々

次

白岸村 〆

おんせの
かた
かた
かた
かた

おんせ

かた

かた

かた

かた

かた

かた

右中勢ノ三ノハ若好ノ若ニテモ
秘蔵ニ玉ニシ色紙七葉ノ内ニ
侍末ノ由ハ爰ニ畧ス

こゝしあゆむを待てしを心ふる
のいぢあふれ人よの生も夜を待つ
しゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
死るゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

神學
學

神學



